

## カントの目的論の原理

細 谷 章 夫

「判断力批判」の目的論的判断力の分析論 (§ 62-§ 68) (A<sup>271-310</sup><sub>C<sup>439-462</sup></sub>)<sup>(1)</sup>は、カントが目的論でなにを考えていたのか組織的に展開しているところである。したがってこの分析論を解明することはカントの「目的論」の基本的な考え方を示すことになる。カントはここですで、目的にかかわる関連をできるだけとりあげる。それはときに幾何学の諸原理間にみられる合目的性（カントはそれを知的合目的性、あるいは形式的合目的性という）であったり、あるときは海と陸地、そこに生息する人間を含む動物や植物との関係（カントはそれを外的合目的性、あるいは相対的合目的性という）であったりする。しかしカントが「自然の目的」と名付け、彼の目的論の形成に重要な役割を果たしているのが、カントのいう有機的存在者である。そこでこの小論の第一章ではカントがどのように有機的存在者を考え、そこからどのような目的論の原理を考えるようになったかを考える。他方カントはこの目的論の原理を有機的存在者だけに適用したのではない。確かにカントの目的論は、有機的存在者が存在することに重要な意味があり、その考察から目的論の原理を導き出したが、それだけで終わらない。カントはそれをさらに拡大して、たとえば自然一般（あるいは自然全体）にまで押し広げていく。したがって第二章は、その原理が自然一般まで適用されると、どのようなことが考えられるのかをみていく。しかしながら、ここに目的論を科学として維持するために、ある種の制限をもうける必要が生じてくる。第三章はそのような制限を含めて、カントの目的論の考え方をさらに明確にしていく。そして第四章では結論として目的論の原理を再考する。

### 第一章、有機的存在者

カントが「自然の目的」というとき、とりあえず、動植物のような有機的物体をイメージしてくればよい。カント自身あるものがそれ自身原因であり、また結果であるときに、自然の目的として現存する (A<sup>286</sup><sub>C<sup>448</sup></sub>) と暫定的な定義をしているからである。カントによると、この自然の目的は理念による規定によってはじめて「目的」の概念が明確化される。カント自身、その理念によってその概念を規定する前に、実例による説明をしているところがあるので、私たちもカントに従って、そこから考えていこう。

それは樹木を実例に挙げる。要約し、かつ解釈を入れて述べることにする。まず第一に、一本の樹木は、別の樹木を生み出す。生み出されたものは同じ種類の樹木である。生み出された樹木は一つの結果であるが、更に別の同種類の樹木を生み出す原因でもある。従って、その樹木の類からみれば、その樹木は一方で結果として、他方では原因として絶えず、自分自身を生み出す。つまり類として絶えずおのれを保存することになる。

第二に一本の樹木は個体としても自分を生み出す。この産出の結果を私たちは生長 *das Wachstum*

と名づけているが、生殖 *die Zeugung* と同じとみなされる。いいかえれば、その樹木の生長の仕方は、その樹木に独特の仕方では形成されるものであって、人工的にその樹木を形成する諸成分から合成されて出来上がるといったものではない。このような例をカントは挙げているわけではないが、例えばリンゴの実、リンゴの実を成立せしめている諸成分から合成によって作りあげられるものではない。私たちがリンゴの実を手に入れるためには、リンゴの木を通してしか手に入れることは出来ないからである。カントはこの事情を「・・・自然物の分析によって得られる諸要素から、あるいは自然がそうした自然物の栄養のために与える素材から、すべての技術が植物界のあのような産物を再生産しようと試みても、あらゆる技術はそこから無限に隔たったままになっている」(<sup>A287</sup><sub>C449</sub>) といっている。

第三にいえることは、一本の樹木に関して、その一部分の保存が他の一部分の保存に相互に依存しあっていることである。消極的な仕方では、カントは繰り返し樹木の葉が落とされればその樹木は枯死するにちがいないこと、それはその樹木の生長が幹に及ぼす葉の作用に依存しているからだという。積極的側面からいえば、樹木のもつ「自然の自助」 *die Selbsthilfe der Natur* の働きにまで及ぶ。接木 *das Pfropfreis* がその良い例である。ある樹木の枝が、他の樹木に接木されると接木された枝から、その枝の種類の果実が生み出されることは私たちのよく知るところである。また樹木のある部分が欠損すると、それを補充すべく自助作用が起こることも私たちはよく知っている。カントは、奇形 *die Mißgeburt* や生長における異形 *die Mißgestalt* が、有機体のもっとも不思議な特有性に属すると指摘している。(<sup>A288</sup><sub>C449-450</sub>)。

以上、一本の樹木の実例を通して、自然の目的としての有機的存在者をどのようにカントは定義していくのであろうか。すでに、暫定的に、「あるものがそれ自身原因であり、また結果であるときに、自然目的として現存する」と定義しておいた。しかしそれは暫定的で不明確な表現であることに変わりはない。ここからどのように明確な概念をカントは導き出すのであろうか。やや込み入った議論に入るが、とりあえず、カントの言い分を耳をかたむけてみよう。

まずカントは二つの因果結合 *die Kausalverbindung* を考える。整理すると

- (1) 作用因による結合 *die [Verbindung] der wirkenden Ursachen* (因果結合 *nexus effectivus*)  
あるいは実在的原因による連結 *die Verknüpfung der realen [Ursachen]*
- (2) 目的因による結合 *die [Verbindung] der Endursachen* (目的結合 *nexus finalis*)  
あるいは観念的原因による連結 [*die Verknüpfung] der idealen Ursachen*

である。(1) は下方に向かう一つの系列で、原因からその結果、さらにその結果へと一つの連結をなす系列である。第一批判で取り扱われた因果法則がこれにあたる。(2) はそれに対して、まさに私たちが論じようとしている連結である。カントはこれを系列とみなすなら下方に向かっても、上方に向かっても依存性をおびているような系列(<sup>A289</sup><sub>C450</sub>) であるという。下方にも上方にも向かうとは、原因が結果になるばかりでなく結果が原因になることも意味する。カントは実践的なものにおいてはこのような連結は容易に見い出されるとし、その実例として、家賃収入をめあてに家を建てた場合を挙げて(<sup>A289-290</sup><sub>C450</sub>) いる。家賃収入は家を建てて人に貸した結果として得られるもので

はあるが、この場合、家を建てる原因ともなっているとの意味で、結果が原因ともなっているわけである。ここで、家賃収入という結果は家を建てるという時点では原因とはなるが、それは観念的原因でしかない。まだ結果として、家賃を受け取っていないからである。(2) が観念的原因による連結といわれる理由である。結合において、原因が実在的な原因ではなくて、観念的原因であることが一つの重要な特色である。

ところで、自然目的としての有機的存在者の概念を規定することに戻ろう。カントは自然目的としてこのものに要求されるのは

- [1] 諸部分が（その現存在と形式に従えば）全体とその諸部分との関連によってのみ可能である（<sup>A290</sup><sub>C450</sub>）。

しかしこの条件では不十分である。諸部分と全体との関連が示されているだけあって、この条件のもとには、機械のようなものも含まれてしまうからである。有機体を機械から区別するものは何か。ここに第二の条件が出てくる。

- [2] その物の諸部分が一つの全体の統一へと結合されるのは、その諸部分が互いにそれぞれの形式の原因でもあり結果でもあるということによってである。

この第二の条件はかなり抽象的である。諸部分が原因でもあり結果でもあるということをカントはさらに次のように補足している。あらゆる部分が他の諸部分を相互に生み出す機関として考えられ、そのようなものこそ有機的存在者としている（<sup>A291-292</sup><sub>C451-452</sub>）のである。そしてさらに例を挙げ、機械と有機的物体の区別を説明する。一個の時計は、ある部分と他の部分から成り立って時計の針を動かす。その限りでは、諸部分は、互いに針を動かすことのために相互にそれぞれの働きをする。しかし、時計における諸部分は、ある部分の働きが止まれば針の動きが正確に機能しなくなるといった意味での結びつきでしかない。いいかえれば、時計の歯車は他の歯車を生み出すことはない。それに対して有機的物体は、ある部分の欠損にさいして、それを補うべく機能する。ある部分にはときには他の部分を生み出すのである。要約すれば、一般に機械は動かす力 **bewegende Kraft** しかもっていない。それに対し有機体は、自分自身のうちに形成する力 **in sich bildende Kraft** をもつ、あるいは自分を繁殖させ、形成する力 **eine sich fortpflanze bildende Kraft** をもっているのである（<sup>A292-293</sup><sub>C452</sub>）。では私たちは有機的物体のこのような能力あるいは性質をどのように考えたいであろうか。

カントは有機的物体のこのような能力を色々な表現をかりて説明し、補足しつつ解明しようとする。そしてこれを機械論的にのみ説明しようとする、全く解明不可能であることを示す。まず、これを技術に類似したもの **ein Analogon der Kunst** と名付けたら、それは十分に特色づけたことにはならない。機械を作りあげた人間を考えるように、その有機的物体を作りあげた、ある理性的存在者（例えば神のようなもの）を想定しなければならないからである。生命に類似したもの **ein Analogon des Lebens** と名付ければ、それよりはまだまし。しかしそのときは、およそ単なる物質としての物質にその本性とは矛盾するような特性、たとえば物活論 **Hylozism** を付与しなければならないか、あるいは、物質には異質であるが、その物質と共存するような原理（靈魂） **ein**

fremdartiges, mit ihr in **Gemeinschaft stehendes** Prinzip (eine Seele) を加えて有機的物質を説明しようとするなら、それは結果的に、有機的物質を靈魂の道具とするのと同じで、有機的物質を何ら説明することにはならない。あるいは靈魂を有機的物質を作り上げる技術者にしてしまい、物質的自然とは全く異なるものにさせてしまうという。以上のことからカントがいいたいことは次のことであると解される。第一に、有機的物体を機械論的に説明しようとしても、それによつては決して、十分説明されたものとはならないこと、第二に、機械論的な説明に、物活論や靈魂といったものを付け加えても、それは結局異質的なものを付与しただけで、そのことによつて物質的なものとの関係が解明されたことにはならず、説明とはならないこと。いいかえれば、第二の条件で述べられた有機的存在者の特性である、「自分自身のうちに形成する力」や「自分を繁殖させ形成する力」を説明したことにならない。カントは、正確にいえば、自然の有機的組織 *die Organisation der Natur* は、私たちが知っているなんらかの原因性と類似したものをなにひとつもっていないこと、有機的存在者が所有しているような内的な自然完全性 **innere Naturvollkommenheit** は、私たちに知られている物理的な自然能力によるなんらかの類似的なものによつては考えられないし、説明されないと明言する (A<sup>294</sup><sub>C453</sub>) のである。とするとカントはどのようにこれを解決しようというのか。

このとき、ヒントになるのが、第二条件で述べられた、諸部分が原因でもあり結果でもあるということ、実践的なものによくみられる (たとえば、すでに述べた家賃収入のために家を建てること) ような目的の概念を導入することなのである。しかしながら、実践的なものによくみられる、このような目的の概念を無批判に導入することには問題がある。なぜなら、このような目的の概念はもともと人間の意図にもとづく人為的な概念だからである。そしてカントの求めているのは、そのような目的の概念ではない。求められているのは自然の目的であつて、人為的な目的ではないからである。かえつてそれに客観的實在性を与え、自然科学として導入するにふさわしい目的の概念なのである。私たちはのちにカントが、人為的な目的の概念から区別して、「自然の目的」の概念のためにさまざまな制限をもうけるのを見るだろう。これは第三章のテーマとなる。今は、自然の目的という語で、そのようなことをカントが考えているのだ、ということを了解するにとどめておこう。ただそのときによく留意しておかななくてはならないことは、そのような目的の概念を導入することができるのは、まさにそれにふさわしい有機的存在者が存在することなのである。いいかえれば、現実には、通常のメカニズムでは説明できない有機的存在者が存在すること、そのことが「自然の目的」としての目的の概念を導入することを可能にさせ、かつ、この概念を自然科学の原理として導入する権利を与えるものなのである。この事情をカントは次のようにいう。「それだから、有機的存在者は、自然における次のような唯一の存在者なのである。もし人がまたその存在者をそれだけで、そして他の物との関係なしに考慮するならば、その存在者は自然の目的としてのみ可能でなければならないものであり、そしてそれだからまず第一に実践的目的ではなく、自然の目的である目的の概念に、客観的現實性 *objektive Realität* を手にいれさせ、そしてそのことによつて自然科学のために目的論への根拠を手に入れさせるものである。すなわち、ある特殊な原理に従つて、その客観的判定様式への根拠を手に入れさせるといった唯一の存在者なのである。そうでないとす

ると、このようなもの〔目的論〕を自然科学へ導入する権利がまったくないことになるだろう。

（というのは、人はこの種の原因性の可能性を全くア・プリオリに洞察することはできないからである）。」(A<sup>295</sup><sub>C453-454</sub>) 要約すれば、実践的目的ではなくて、自然の目的としての目的の概念に、客観的現実性を与える唯一のものは、有機的存在者が存在するということにあるということなのである。それだからこそ、実践的目的といった主観的なものではなく、自然科学として十分に役立つ、客観性のある目的論を導入することもできるのである。ややふえんして逆のいい方をすれば次のようないい方になろう。人がもし目的論のような人為的な概念を自然科学に持ち込むことは誤りであると反論したならば、少なくとも目的論を導入しなければけして説明することができないものがあること、それが有機的存在者なのである、といい返すことができるわけである。では、基本的に有機的存在者を説明する目的論の原理とは何か。

§ 66「有機的存在者における内的合目的性の判定の原理について」の最初にカントはその原理を示す。「この原理は、これは同時に有機的存在者の定義ともなるが、こうである。すなわち、自然のある有機的な産物はそこではすべてのものが目的であり、また相互に手段でもあるところのものである。この産物にはなにも無駄なものはない、目的のないものもなく、あるいは盲目的な自然のメカニズムになにもものも帰すことはできない」(A<sup>295-296</sup><sub>C454</sub>)

このカントの定義は重要である。まずこのカントの定義をざっと概観し、そのあとでこの原理に関する私の理解を示しておきたい。やや結論めくが、ここでの私の理解はのちのカント目的論に対する基本的解釈でもある。

カントはこの原理が同時に有機的存在者の定義としていることである。そしてその定義とは、有機的存在者における諸部分相互と全体との関連としてとらえられ、それが目的と手段との関連と把握されていることである。そのことの意味はカント自身がいうように、自然のメカニズムではどうしてもとらえられないものがあること、すなわち自然の目的としてしかとらえられないものがあること、少なくとも有機的存在者とはまさにそのようなものなのがある。その有機的存在者に関していえば、その観点からみれば目的のないものはなにもない。有機的物体のそれぞれの諸部分は、なんらかの目的のもとに機能している。より簡単にいえば、この原理に従う限り、有機的物体のそれぞれの部分に無駄なものはなにもないのである。

カントのこの原理に関するこの考え方はこれでいい。私のカントのこの原理に関する理解は次の通りである。賢明な読者はすでにお気づきのことと思うが、カントがここで述べている有機的存在者の定義は、今まで述べてきたカントの有機的存在者に関する特色づけに比べ、弱い条件で提示されているということである。今までカントが述べてきた有機的物体とは機械のような動かす力ではなくて、自分自身のうちに形成する力をもつものとしてであった。あるいはもっと強力な言い方であれば、自分を繁殖させ、形成する力をもつものとして、有機的存在者を特色づけたのであった。ところがこの原理では、この特色は弱められ、「手段と目的の関連」に解消されているのである。私の理解では、この目的と手段の関連からは、ある種の有機的存在者がもつ、この「自分を繁殖させ、形成する力」をもつものとのこの特色はどうみても導き出されない。明らかにここに概念の一般化

がある。それはカントのこのような一般化、あるいは有機的存在者の定義が弱い条件であることに、私が非難しているといったことではない。そこにカントの目的論の一つの特色があるといいたいのである。結論を急ごう。カントはこの原理が同時に、有機的存在者の定義でもあるというが、それは有機的存在者だけの定義なのではないこと。有機的存在者の最低の条件（弱い条件）を示すことによって、有機的存在者以外のものにもこの原理を適用することをカントは考えて、定義しているのである。具体的にいえば、たとえば自然全体である。自然全体（第二章はそれをテーマとする）を有機的存在者とみることは、目的論を自然科学の原理と考える限り、かえってしてはならぬことかもしれぬ。しかしこの原理はのちに見るように、自然全体をもこの原理の適用範囲に入れることになる。その限りでこの原理は、有機的存在者を含めて、他のものをも適用範囲に入れることを考慮して、示された原理なのである。このことに関してはのちにまたふれることにしよう。ただここにカントの目的論の一つの特色があることだけは指摘しておこう。

次にカントがこの原理に関して説明している箇所（ $\text{A}_{296}^{\text{C}_{454}}$ ）について、私たちは考えていくことにしよう。カントによるとこの原理はきっかけからいえば、確かに経験から導かれる、つまり観察といわれる経験から導き出される。「・・・しかしながら、このような合目的性に関して原理が表明している、一般性と必然性のために、この原理はたんに経験的根拠に基づくのではなく、かえってア・プリオリななんらかの原理をその根底にもっているに違いない。たとえこの原理が、ただの統制的であろうとも、またあの目的が判断するものの理念のうちにあり、作用因のどこにもないものとしてもである。」だから上記の原理を「有機的存在者の内的合目的性の判定の格率」 eine **Maxime** der Beurteilung der inneren Zweckmäßigkeit organisierter Wesen と名付けられる（ $\text{A}_{296}^{\text{C}_{454}}$ ）としていたのである。要約すれば、この原理はきっかけからいえば観察と呼ばれる経験から導き出される。しかし、この原理は、統制的なア・プリオリな原理によるものであること、それはこの合目的性に関するこの原理のもつ、一般性と必然性によるものであるということである。それでは、この原理が、統制的原理とされる理由は何なのか。またこの原理のもつ一般性と必然性とは、どのようにものであるのか。

この問題についてのカントの解答は実際、この分析論だけでは不十分で、弁証論にもかかわる。ここではとりあえず、この分析論の範囲で示されているかぎり、カントの考えを要約して示しておこう。カントのこの原理の一般性に関する考え方は次のとおりである。植物や動物の構造を探究している人が、あの動植物の諸部分になにひとつ無駄なものはないとの格率（原理）を、どうしても必要なものとして採用するのは、ちょうどなにものも偶然からは生じないとの一般的自然論の原則を採用するのと同じで、その格率を正当なものとしみなしているのはよく知られている。事実、彼らはこの目的論的原則を放棄することはできない。それは一般的な物理的原則を放棄しえないと同じこと。もし物理的原則を放棄したなら、自然法則ばかりか経験そのものをも成立しなくなる。それと同時に、目的論的原理を放棄したのなら、ある種の自然物、たとえば動植物を観察する手引きすらなくなってしまう、というのがカントの論法（ $\text{A}_{296-297}^{\text{C}_{454-455}}$ ）である。

ここに目的論的原理の一般性と一般的な物理的原理の一般性の範囲が示されている。つまり、物理的原理の一般性は、自然必然の法則としての因果法則そのものばかりでなく、経験そのものを成り立たせているもっとも基本的で、一般的な原則なのである。それに対して、目的論的原理は、それがなくてもせいぜい、有機的存在者に対する認識を欠くといった程度の一般性なのである。もちろん、その原理なしには、有機的存在者は把握されず、そこには盲目的なメカニズムが存在するだけ。しかし一般的な物理原則がなかったら、そもそも経験そのものすら成り立たず、目的論的原理は意味をもたない。このことは、目的論的原理はあくまでも、一般的な物理的原理があって、そのうえではじめて考えられる原理なのである。従って、この目的論的原理のもつ一般性とは、いわばある特殊な存在（有機的物体）に限られた一般性なのである。

この目的論的原理の必然性は、この原理が格率であること、いいかえれば統制的原理であることにかかわる。結論をいえば、この統制的原理が現実のものにかかわるかかわりあい方は、例えば構成的原理である因果法則が現実のものにかかりあう仕方とは、基本的に違うということである。統制的原理の現実とのかかわりあい方は、構成的原理に比べ、弱い仕方ではない。以下、この目的論的原理が、統制的原理であること、それだから、構成的原理との比較でいえば、現実と弱い仕方でのかわりあい方ではないことを示そう。

すぐ上で述べた、原理の一般性の問題も実はこのことに関係する。目的論的原理は、物理的原理をふまえたうえで成り立つのであった。自然のメカニズムというか、物理的原理というべきか、これらの原則や仕組みなしには経験そのものすら成り立たないのである。自然を原因・結果の網の目に組み込まれた、自然必然の法則の支配するところとみるのも、これら諸原則を認めたうえでのことである。そのうえでなお目的論的原理が支配する領域があることが主張されている。だから、物理的原理がより基本的に現実とのかかわりを強くもつ。それに対して目的論的原理は、現実とのかかわりにおいては、物理的原理を前提するかぎり、間接的で、比喩的にいえば弱い仕方ではない。

も一ついえることは、あの目的論的原理には理念が入り込むことである。ここで入り込む「理念」とは認識に統一を与えるための理念なのである。もともと人為的意味をもつ目的と手段という関連が、実践的な意味でいわれるならば、それは「理念」というよりは「意図」というほうがふさわしいだろう。カントの主張する目的論的原理は、のちに述べるが、この「意図」を排除した原理なのである。ただある種の自然物〔有機的物体〕を一つのまとまりのあるものとして認識するための統一の原理としての理念なのである。だからそこでいわれている目的と手段は、実践的意味ではなく、相互に諸部分がかわりあう仕方を表明していて、認識的意味でいわれているのである。カントは、この目的論的原理なしには、有機的物体を観察するためのどのような手引きもなくなってしまうとしたあとで、次のようにいう。「なぜなら、この〔自然の目的という〕概念は自然のたんなるメカニズムとは全く別の諸物の秩序へと理性を導き、そこでは、もはやメカニズムでは私たちを満足させないからである。自然産物の可能性の基礎には、ある理念があるはずである。しかしこの理念は物質が、それだけでは合成のどんな規定的統一を与えることができない、事物の数多性であるのと違って、表象の絶対的統一であるのだから、もし理念によるあの統一が、それに加えてさらに、合

成されたもののこのような形式の原因性の自然法則のア・プリオリな規定根拠として概念は役立つはずであるならば、自然の目的は自然の産物のうちにあるすべてのものへ広げなければならない。・・・」(<sup>A297</sup><sub>C455</sub>) 自然の目的という概念はメカニズムとは全くべつの秩序へともたらすものであり、それは働きとして理性による「ある理念」の働きであって、その理念によって表象の絶対的統一が与えられること、そして、このような自然の目的の概念は自然の産物のうちにあるすべてのものへと及ばなければならないことを示しているのである。たとえば鳥の構造——骨の空洞、運動のための翼や進路をとるための尾の位置など——は、目的論的原理をとおしてはじめて理解されるものである。カントは別の箇所(<sup>A269</sup><sub>C438</sub>)で自然を目的に従う原因性との類似にしたがって、観察や探究の諸原理へともたらしたもので、そのことによって自然を説明したことにはならないとしている。目的論的原理のもつ必然性に関して要約するというならば、けして現実のものとかかわりをもたないわけではないが、それは、この原理そのものを導入してはじめてそのような関連が明確に示されるといった性質のものなのである。カントもいうように(<sup>A310</sup><sub>C462</sub>)その必然性は、私たちの概念の結合にかかわる必然性であり、諸物の性質にかかわるものではないのである。

## 第二章 自然一般（あるいは自然全体）

前章で、目的論的原理が動植物のような有機的物体の原理であることを説明してきた。この第二章ではカントがこの同じ原理を自然一般にまでおしすすめて適用しようとすることを示す。このことはすでに結論を先取る仕方で触れておいたが、難解なカントの主張をより理解しやすくするためであった。つまり、この目的論的原理が有機的物体ばかりでなく、たとえば自然全体にまで及ぼす原理であること、そこにカントの目的論の一つの特色があるということである。ここではその間の事情をカントの主張に基づき、より詳しく述べ、そこからどのようなことが帰結するのかを示そう。

やや横道にそれるが、カントの分析論を読んだ人はなぜ§ 62でカントが述べている形式的、客観的合目的性に関して筆者は言及しないのか。あるいは§ 62と§ 63でカントが自然の、相対的合目的性に関して言及しているのに、筆者はほとんど触れていないのは何故か、との疑問をもたれるかもしれない。それはカントが結論として、内的合目的性をもつ有機的存在者をもっとも重視し、そこから目的論的原理を引き出していること、それに対して、上記の二つの合目的性は、確かにある種の合目的性はあるが、目的論的原理との観点からいえば、いわば除外された合目的性だからである。しかしここにもカントの主張に、興味深い点が見られるので、ごく簡単であるがやはり触れておこう。

形式的で（実在的でない）、かつ客観的合目的性をもつものとしてとりあげられているのは、幾何学の諸原理間に見られる合目的性である。だからカントは知性的合目的性 *die intellektuelle Zweckmäßigkeit* (<sup>A274</sup><sub>C441</sub>)ともいっている。たとえば幾何学の解法において、図形を通して見られる一つのこの原理の法則性は驚くべきものであったし、また円錐曲線をも幾何学者たちは、それだけで探究したが、それはのちに、重力の法則が発見されたとき、自由に運動する天体に楕円という線を描かせることになった。幾何学者たちは、この幾何学のうちに、諸物の本質におけるある合目的



性を発見し、喜びを覚えた。あのプラトンが、あらゆる経験なしに発見することのできる諸物のそうした根源的な性質に関して、感激して、それが結局、イデア論にいきつく。すなわちカントによるとプラトンにとって、イデアがあらゆる存在者の根源との知的な交わりを通してのみ、説明されるようみえたのであるという。だからプラトンが幾何学を知らないものを、その学園から追い出したのはなんら不思議ではない。自然をおおいに感嘆させる根拠が、私たちの外なる自然にあるのではなくて、私たちの理性のうちにあるとプラトンはみたからである。それがプラトンにおいて、誤解により次第に高まっていったのは、おそらく許されるべきであろう（プラトンに関しては（A<sup>273-274</sup><sub>C<sup>440-441</sup></sub>））と同情的である。しかしカントはプラトンの考え方をとらない。そこにある種の合目的な関連を認めはするが、それはあくまで形式的なものでしかなく、諸物の性質や現存に関係するものではないこと、従ってここで問題としようとしている現実的な自然目的とは、別個のものと考えたのである。カントは純粋数学に関して次のようにいうが、それは当然幾何学の諸原理間にみられる合目的性に関しての言及でもある。

「純粋数学において問題であるのは諸物の現存ではなく、ただ諸物の可能性であること、すなわち諸物の概念に対する可能性なのであって、それだから全く原因や結果ではあり得ないのだから、したがって、そこで認められるすべての合目的性は、単に形式的なものとして考えられるのであって、けして自然目的とは考えられない」（A<sup>279</sup><sub>C<sup>444</sup></sub>）のである。

自然の相対的合目的性に関して、カントは得意な自然地理学の知識を援用して論ずる。そのいくつかをとりあげよう（§ 63（A<sup>279-284</sup><sub>C<sup>444-447</sup></sub>））。河川は植物の栄養物を土壌と共に河口に運ぶ。潮流はこの泥土の多くを海浜に運びあげる。だから人間がその泥土を海に流れでないようにせきとめれば、肥沃な土地となる。以前魚介類が住んでいたところが植物の占める場所となる。ところでこのことは人間にとって有益なことであるから、それを自然の目的とすることができると問う。そのようにはいえないというのが答えである。なぜなら植物増大は人間に有益かもしれないが、海洋の生物にとって生存の場所が奪われたわけだからである。まだドイツトウヒFichteの例をあげる。トウヒほど砂地に適した樹木はないこと、ところで、海が後退して北ドイツ地方に多くの砂地帯を残したのは、トウヒの森林をつくるための自然の目的であるといえるだろうか。それは相対的目的といえるだけで、太古の海とその後退はそのための手段とせいぜいいえるだけであるとする。さらに寒冷地帯に住む、動物や人間の適応の仕方にも言及する。この地方の雪が種子を冷害から守り、ソリの使用によって人の往き来を容易にする。トナカイは雪の中のコケを食べ、人間の家畜として役立つ。また同じ寒帯の諸民族にとっては海は豊かな動物を貯蔵し、人間に食料や〔毛皮製品としての〕衣服を提供する。また海は住居の材料あるいは暖房の材料として、木材を漂流させる。ここには実に、ある目的に対する自然の驚くべき諸関連が集まりあっている。そしてその目的とはまさにグリーンランド人をはじめとする寒冷地帯に住む人々である。それだからといってこの関連を自然の目的とはいえないというのが、カントの考え方である。なぜなら、なぜ人間がそのような土地で生活しなければならないのか、わからないからである。したがってこのような関連は諸自然物の外的で相対的な合目的性でしかないのである。あるいはこの外的な関係はただ仮説的に合目的性と判断される

だけなのである (A<sup>298-299</sup>  
C<sup>455-456</sup>)。

議論を有機的物体から、自然全体に目的論的原理が適用されとするカントの主張へ移そう。以上の知的合目的性、相対的合目的性の議論をふまえカントは次のようにいう。「ある物をその内的形式の理由で自然目的と判断することと物の現存を自然の目的とみなすことは全く別のことである」(A<sup>299</sup>  
C<sup>456</sup>) 前者はすでに述べたこと、有機的存在者についての言及であり、後者は、すぐ上で述べた外的でかつ相対的な合目的性に関して述べているのである。後者に関してカントはさらに、これを自然の目的と主張するためにはある可能的目的の概念を必要とするばかりでなく、自然の究極目的 (scopus) の認識をも必要とすること、その究極目的の認識は自然と超感性的なものとのある関係を必要とし、その超感性的なものとは、私たちのあらゆる目的論的認識をはるかにこえているものなのである。というのは、自然そのものの目的が自然を越えて求められなければならないから (A<sup>299</sup>  
C<sup>456</sup>) である。この意味は次のように解される。有機的存在者は全体がまず与えられて、その内部の諸部分の関連をみるとき、メカニズム的な考えばかりでなく、さらに目的論的な考え方がどうしても必要である。そうしないと有機的存在者を全く理解することはできないからである。それに対して自然は全体としてまとまりあるものとして、私たちに与えられているわけではない。私に与えられているのはその自然の諸部分なのである。そして自然一般 (自然全体) とは、そうした諸部分の関連を通して得られた像でしかない。したがって諸部分の関連の認識が増大すれば、自然全体の像も拡大する。すなわち、自然全体は有機的存在者のように規定的に与えられているのではなくて、本来的に、無規定なのである。ところでその自然全体に目的論的原理を導入するとは、何を意味するのか。自然全体を有機的存在者のように、全体として規定的に与えられたものとして取り扱うことを意味する。もし、自然全体がほんとうに私たちに規定的に与えられているならば、私たちは有機的存在者に対すると同じように、目的論的原理を導入するのがふさわしいと判定することができる。つまり自然全体が大きな生命体であるか、あるいはなんらかの目的という傾向性を強くもっているかどうかを判断できるからである。いいかえれば、そのような傾向性へと向かわせるなんらの超感性的なものの存在を想定することが十分に可能だからである。だから自然全体が究極目的をもつ存在であるかないかは、自然全体が規定的に把握されたときに、はじめて知ることのできることなのである。ところが実際には、自然全体は無規定的であるのなら、究極目的を示す超感性的なものが自然の内にあるのかどうか、あるいはそのようなものが自然の外から自然全体を動かしているのかどうかを、私たちの知りうる自然内部の諸関係から推測するはできない。だからこそカントは、「ある物をその内形式の理由から自然目的と判断することと、物の現存を自然の目的とみなすことは、全く別のことである」といったのである。ここだけを読むと、それでは自然全体に関しては、目的論的原理を適用することはできない、あるいはその必要はないということになる。なぜならば自然全体に関していえば、有機的存在者のように、明らかにその原理を使用しないのなら、有機的存在者を全く理解できないといったものではないからである。ところが実際は、その原理を自然全体に関して適用してもよいとカントは結論づける。それは一体どのような理由からなのであろうか。結論を急ごう。

要約すれば次のようになろうか。自然全体にその原理を適用すると、それなりにある種の認識を得るとの有用さがある。だから、この原理をひとたび発見したからには、それを自然全体に拡大してもさしつかえない。なぜならば、自然全体というものを考えるならば、そこには有機的存在者と同じように、なんちかのものによる統一といったものが十分考えられるからである。ここのこの考えには少なくとも次のような考え方がひそんでいる。有機的存在者にとって、この原理を導入することは非常に有用であるばかりか、有機的存在者を有機的存在者として認識するためには必要なことであった。だからこの有機的存在者でのこの原理の重要さを根拠に、他のものに及ぼすこと、ここでは自然全体に原理を適用することは、いっこうにさしつかえないことである。まして原理の適用によって、有用さが見い出されるならば、そのことによって十分その原理の導入の正当性が保証されるといった考え方である。そして事実、自然全体にその原理を導入することは十分有用であるとカントは考える。§ 67の最後の部分はやや長いが、重要なので引用しておこう。「私たちがこの節でいいたいのは次のことにほかならない。目的因という概念にしたがってのみ、私たちによって考えられる諸産物を生み出すある能力を、一度私たちが発見したならば、私たちは更におし進め、それらの諸産物（あるいは、たとえ合目的性であるにせよ、その産物の関係）は盲目的な作用因のメカニズムを越えて、ある原理を自分の可能性のために探し出すこと、まさにそのことを必然的とするわけではないが、目的のある体系に属するものとして判断することは許される、ということそのことである。なぜならば、最初の理念がその根拠に関していうならば、私たちをすでに感性界を越えて連れ出すからであり、そのとき超感性的原理の統一は自然存在者のある種の種類にとってもばかりでなく、体系としての自然全体 *das Naturganze als System* にも同じやり方であてはまると考えられなければならないからである。」（<sup>A304</sup><sub>C459</sub>）それでは自然全体にその原理を適用したことにより、出てくるある種の認識とはなにか、それをカントの示すところにしたがってやや要約して述べていこう（以下<sup>A301-304</sup><sub>C457-459</sub>）。

草は牛や羊のためにあり、牛や羊は人間のためにあるなどと断じていうことはできない。それと同じように、私たちにとって不快なものをも別の視点から見るとは有益なこと、たとえば、人間の衣服、頭髮、あるいは寝台のなかにいて悩ます害虫〔のみ、しらみなど〕は、ある賢明な自然の配慮によるものであるかもしれない。つまり、人間が健康保持のためにもっとも大切なこと、清潔さを保つようにするための刺激といえる。アメリカの荒野において、未開人にとって厄介な蚊やその他の毒蛾は、湿地を干拓し、密林を開き、開墾して、彼らの居住地を同時に健康的にするための刺激剤となりうるかもしれない。だから人間にとって反自然的と思われるものも、目的論的秩序への、ときには教訓的な展望を与えてくれる。たとえば一部の人々は、サナダムシは、それが寄生している人間あるいは動物にとって、その生命機関のある種の欠陥の代用として存在すると判断する場合がそれである。またカントは、夢（それは人はほんのわずかし記憶していないが、夢を見ない睡眠はけしてないとする）は自然の一つの合目的な配慮 *eine zweckmäßige Anordnung der Natur* ではなかろうか、という。簡単にいえば、睡眠中、私たちが生命を保持してられるのは、絶えず夢を見ることによってであること、つまり夢がなんらかの仕方で生命機関を動かしていると

考えられるというわけである。この着想はカントにとって、一つの発見であつたらしく、かれの「人間学<sup>(2)</sup>」においても触れている。

さらに自然の美 *Schönheit der Natur* についても、体系としての自然全体を意味する自然の客観的合目的性と深いかわりをもつことを、カントは言明する。これはカントの美の分析においては、言及しなかったことである。この節にいたってはじめて述べられている。そしてさらに、自然が有用だけでなく、美しさと魅力をこのように豊富に分け与えたこと、それを私たちは一つの恩恵とみなすこと、またそれだからこそ私たちは自然を愛し、その自然の測り難しさを理由に、尊敬をもって自然を考察すること、これらすべてが自然全体としての客観的合目的性の概念を獲得したことによって生じること (A<sup>303-304</sup><sub>C<sup>456-459</sup></sub>) なのである。しかしここでは、自然の美と自然の客観的合目的性に関してやや詳しく述べておこう。なぜなら、この関係はカント哲学の体系の一部として、ぜひ明確にしておくべきことだからである。

カントの「美」そのものの解明に関しては、すでに私の発表した論文<sup>(3)</sup>に詳しく述べてあるので、ここではくり返さない。ここに関連するかぎりで要点をいえば次のようになろうか。カントによると美しいものを美しいとさせるものは、快適なものとは違う。たとえば「この白ブドウ酒はおいしい」は、快適なものに関する判断で直接的である。それに対しての美の判断は主観の反省を通して快の感情が引き出されるもので、間接的である。その主観の側の反省とは次のことを意味する。美しいものを美しいと感ずるためにはまず、対象が与えられなくてはならぬ。それは自然の美のように、ある景色や花でもいいし、また抽象絵画のような自由な線描でもいい。また、なにか形ある対象ばかりでなく、その対象は自由な旋律といったものでもいいのである。そのような美をひきおこす対象が与えられると、私たちの主観のうちに一種の調和が生じる。カントによるとそのメカニズムは次のとおりである。主観の諸認識能力のうちでその主役は想像力 *Einbildungskraft* と悟性とである。それら諸能力の活動に活気を与えるのが美をまさに引き起こす、対象から得られる感覚なのである。想像力は、その感覚と悟性の中間項としてもっとも重要な働きをする。とにかくこの諸能力間に調和の関係が成立したとき、そこに一種の快が生じ、美しいものを美しいと感じさせるというわけである。この諸能力間のメカニズムは、認識におけるメカニズムとは異なって示され、そのことによって美のもつ一般性や必然性が認識のもつ一般性と必然性とは違ったものであることが説明されるのである。そのことが美の解明において重要なことではあるが、ここではこれ以上には述べない。ただ想像力に関していえば、次のことがいえる。美の観賞と美の創造に関してである。私の理解に従って単純化していえば、美の観賞においては感覚から中間項の想像力、そして悟性へと諸認識能力が機能する。しかし美の創造にあつては、逆に悟性から想像力そして感覚へと機能する。つまり感覚化されて、具体的には作品として表現されるわけである。だから創作者にとってまず、作品は概念としてとらえるというわけである。もちろん諸認識能力間の機能の仕方は、実はこのように一直線的なものではなく、相互にフィード・バックしあう働きなのである。なぜなら、この美の判断においては、諸認識能力間に「遊び」があること、自由な働きがあることが一つの特徴だからである。そして、この諸認識能力間に調和の関係が成立することをカントは主観による合目的性

によって説明する。これが主観の側の反省ということの意味である。ところでここで問題なのは、何が主観の側（諸認識能力間）に合目的性を生じさせるのか、ということである。

「判断力批判」の「美しいものの分析」( $A^{3-73}_{C271-315}$ )では、実はこのことについて答えていないのである。カントによると、これこれの対象が必ず快を生じ、この対象を美しいと感じさせると特定できないのである。いいかえれば、理論的に対象の諸形式のうちに美の本質を見い出すことができるとする考え方には賛成しない。主観に合目的性をもたらす対象とは、その対象の性質の概念にかかわるのではない。かえって、美の判断の一つの特色は、対象の形式には無関心であるところにある、それがたとえば客観的な認識と決定的に異なるところである。だからある対象が美を感じさせたとしたら、それは恩恵( $A^{15}_{C279}$ )だとしている。このことは何を意味するのか。美の観賞の側面からいえば、カントは一種の美の一般性を主張するものの、ある対象に対して、美と感じる人もいれば美を感じない人もいるということになろう。また美の創造の側面からいえば、美の創造者である芸術家とは人々に主観の合目的性を生じさせるようななんらかの対象を提供する発見者といえるだろう。

では美しいものの適意が恩恵だとするならば、それを恩恵とさせている論拠とは何か、との問題にいたる。そのとき私たちはようやく、自然全体という客観的合目的性の概念に到達するのである。私たち人間は確かに美しい景色を見て、自然に美を認める。と同時に芸術作品を通して美を創造する。しかしいずれにせよ、人間は自然全体のうちの一つの存在にすぎない。そこには自然の美も人工の美の区別はない。自然の一部としての人間があるだけである。目的論の原理が導入されて、しかもそれが自然全体にまで適用されると、そこに次のような自然全体の考え方が生まれる。自然全体が自然の美をいわば、私たち人間に与えたもの、いわば自然の恩恵とみなすよう促すのである。カントはこの事態を次のようにいう。「自然の美は、すなわち自然の現象を把握し判断するさいに、私たちの認識能力の自由な遊びと自然が一致することもまた、このようにして、人間が一つの項である体系としての、その全体における自然の客観的合目的性と考えられるのである。それは自然の目的論的判定が、有機的存在者が私たちに提供する自然目的を通して、自然の目的という一つの大きな体系の理念に対する根拠を私たちにひとたび与えたときである。」( $A^{303}_{C458}$ )。そして自然の全体としての客観的合目的性が、自然のうちに見てとるとすぐに、私たちは自然の「一つの恩恵として」als eine Gunst ( $A^{304}_{C458}$ )考えることができると続ける。すなわち、自然はその有用性を越えて、美しさと魅力を豊富に分け持っていること、そしてそれだから私たちは自然を愛すること。自然の測り難しさを理由に自然を尊敬すること、このように考えると私たち自身さえ高貴と感ずることができること。そのことはまさに、あたかも自然がもとこのような意図で、そのすばらしい舞台をしつらえて、飾りたてたかのようなのである( $A^{303-304}_{C458-459}$ )とさえいう。そして自然を「一つの恩恵として」との箇所にカントは注をほどこす。要約すれば次のようにいう。「美しいものの分析」( $A^{3-73}_{C271-315}$ )では、私たちは美しい自然を恩恵をもって眺めるとだけいったこと。それはそこではまだ、どのような目的でこのような自然が存在するのか、といったことは全く配慮されていなかったからである。しかしこの自然全体という目的論的判断をも考慮しているここでは、この関連がはじめて述べられ

る。すなわち自然を一つの恩恵としてみるものの意味がはじめてここで示されたわけである。ややくどくなるが、重要なのでカントの注のその部分を引用しておく。「美感的部門でいわれたのは次のことである。すなわち私たちは美しい自然を恩恵をもって眺める、というのは私たちは自然の形式においてある全く自由な（無関心な）適意をもつからであると。なぜならば、たんにこの趣味判断においては、どのような目的のためにこの自然美が存在するのかを全く考慮されなかったからである。すなわち、私たちに快を目覚めさせるために存在するのか、あるいは私たちとのすべての関連なしに目的として存在するのかを、全く考慮されなかったからである。しかしながら、目的論的判断においては、この関連にも私たちは注目する。そしてそこでは自然の恩恵として眺めることができること、すなわち自然はこのように多くの美しい形態を配慮することによって、私たちに開花するよう、うながすことを欲していたものとして眺めることができるのである」(A<sup>304</sup><sub>C458-459</sub>)。最後に一つ付け加えておきたいことがある。この章で自然全体に目的論的原理を適用できたのは、この原理の適用が有機的存在者に必要なばかりではなく、それなしには有機的存在者はいないというのが根拠であった。自然全体は私たちに閉じた体系として与えられたものではないのかかわらず、さらにはカントはこの原理を拡大して適用することを許容したのであった。とするならば、その論法に従えば、その原理の適用はなにも自然全体だけに限定する必要はないのではないか、ほかにも考えられるのではないかと、ということになる。事実、カントはある注のなかで、国家を一つの有機的組織と見たてているのである。その部分を一部引用するところである。「……だからある大きな民族を一つの国家へと全面的に企てられた最近の再編成にさいして人は行政高級官職などの仕組み、そしてまた前国家体制の仕組みさえも、たびたび有機的組織 Organisation という語を実に適切に利用してきた」(A<sup>295</sup><sub>C453</sub>)。このことは1776年のアメリカ独立のことを指しているといわれている。これを見ると明らかにカントは、国家組織に有機的存在者と同じ特性を認めていることになる。ということは、目的論的原理の適用は、有機的存在者を基本とするが、それは自然全体ばかりでなく、国家組織にも適用可能な原理なのである。さらにふえんすれば、カントはその原理を自然全体と国家組織に適用しうることを示したが、それ以外にも適用可能であることを意味する。筆者がこの章の最後に付け加えたかったのはまさにこのことである。

### 第三章 自然一般としての自然の目的

第一章で、自然の目的とはさしあたり有機的存在者のことであるといっておいた。そして第二章では目的の体系として自然一般（自然全体）をとりあつかい、それも自然の目的とみなした。しかし両者に基本的な相違があることはすでに指摘してきたとおりである。有機的存在者はそれ自身、自然の目的とみないならば、すなわち目的論的原理を導入しなかったのなら、有機的存在者そのものが成り立たないからである。さらに有機的存在者は、一つのまとまりあるものとしてその全体が私たちに直接与えられており、その諸部分の関連を考えると、どうしても目的論的原理なしに考えられないのである。それに対して目的の体系としての自然一般（自然全体）はどうか。まず自然全体が与えられていたわけではない。私たちは自然の一部分の諸関連から、自然全体を推測してい

るにすぎないのである。したがって自然全体は本来的に、閉じた体系ではなくて無規定的なものである。しかし、その自然全体を一つのまとまりあるものとの観点から見るとは、私たちに新しい一つの視点を与える。第二章ではそれを取りあつかってきた。そこではどちらかという、そのような視点から生じる有用さに目を向けてきたといえる。この第三章では、それとは逆に、私たちがおちいりやすい誤用に目を向ける。その意味でここで問題となる自然の目的とは、自然一般（自然全体）としてのそれであって、有機的存在者としての自然の目的ではない。なお、自然の目的とカントがいうとき、それは有機的存在者と自然全体に関してであって、目的論の原理が及ぶところのすべてであるとはいえない。私たちは今やここで§ 67「自然科学の内的原理としての目的論の原理について」（A<sup>304-310</sup>/<sub>C<sup>459-462</sup></sub>）を取りあつかおうとしている。

カントが§ 67で主張しようとしていることは明白である。一言でいえば、「目的論」を科学的概念として使用することを目指しているのである。逆にいえば、これは非科学的概念にもなりうる余地がある。カントにいわせれば、「自然の目的」という表現はすでにそのことを避けるための表現だった（A<sup>305-306</sup>/<sub>C<sup>460</sup></sub>）のである。つまり目的論的判定が、神の考察 *die Gottesbetrachtung* や、ある神学的な導出 *eine theologische Ableitung* と混同されないようにするためだったのである。なぜなら下手をすると、それは自然の目的という表現を自然の配列のうちにある、神的目的 *ein göttlicher Zweck* という表現と取り違え、さらに自然における合目的な諸形式から、最後にはある賢明な世界創造者 *ein weise Welturheber* を導き出すようなことになりかねない。だから私たちが知っていることとまさに同じだけのことをいうように、自然の目的という表現を制限したというのがカントの主張の主旨（A<sup>305-306</sup>/<sub>C<sup>460</sup></sub>）である。以下、自然の目的という概念を科学的概念として取りあつかうために誤用とならないよう、いくつかのことをカントに従いながら、要約して述べておく。

それぞれの学はそれだけで一つの体系であって、完結しているもの。もちろん学の諸原理を他の学より借りてくる場合もあり、そのときはその学はその教説の根底に補助定理 *Lemmata* をおくことになる。しかし基本的に一つの学は全体として、それだけでとりあつかわねばならない。ところで、もし自然科学のために自然の中の合目的性を説明するために、神の概念をひきいておいて、そしてそのあとで、神が存在するということを証明するために再びこの合目的性を利用したらどうということになるか。二つの学のいずれも存立しない。一つのごまかしの循環論法 *eine tauschende Dialelle* が、それぞれの学を不確実なものにしてしまうからである、というのがその第一である。

第二は算術や幾何学の諸原理感にみられる自然の諸性質に関して（カントはこれを形式的合目的性、あるいは知的合目的性と名付けた）である。これら諸原理は確かに経験にかかわりなく、ア・プリオリに論証される。だからといって、これら諸原理間の関連がどれほど合目的性を帯びていようとも、それを物理学における目的論的説明の根拠として要求する権利はない。なぜならば、自然一般の諸物の合目的性に関する一般的理論は、自然科学のどんな内的原理でもありえないこと、それは形而上学に属するからである（A<sup>306-307</sup>/<sub>C<sup>460-461</sup></sub>）。すでに説明したように、自然全体がある目的のものに関連しあっているのかどうかは、自然全体が規定的に把握されて判明することである。もっとわかりやすくいえば、自然全体がことごとくその内的諸関係が見い出されてはじめて述べられるこ

とだからである。しかし有機的存在者は、自然全体とは事態が全く違う。有機的存在者に目的論的原理を使用することは許されているばかりではなく、不可避的なのである（<sup>A307</sup><sub>C461</sub>）。

第三は物理学の目的論に対する制限と、目的論その物の限界に関するカントの考え方である。まず物理学は自然目的が意図的である *absichtlich* か、意図的でない *unabsichtlich* か、という問題を全く問題としない。それは形而上学の問題であって、物理学には縁遠い仕事だからである。つまり物理学はある超自然的原因をひきこむことはできないのである。目的論においても同様のことがなされる。確かに、この目的論は自然に関して、あたかも自然における合目的性が意図的であるように語りはするが、そのことによって、超自然的原因を考えたり、自然を一つの悟性存在者 *ein verständiges Wesen* とするのでもなく、また工作者として自然を越えておくのでもない。そのようなことは僭越きわまること、そうではなくて、機械的な諸法則にしたがった探究法とはちがった一つの探究法〔目的論のこと〕をつけくわえることなのである。つまり目的論は機械的な諸法則の探究法では十分ではないところを補充して、自然のあらゆる特殊な法則を経験的に拾い集めようというわけである。このときの目的論はカントの哲学体系からいえば、理性の使用によるものであり、反省的判断力の原理なのである。機械的な諸法則を構成する悟性によるカテゴリーではなく、したがって、規定的判断力の原理ではない（<sup>A307-309</sup><sub>C461-462</sub>）。カントはこのようないいかたはしていないが、自然一般におけるこの目的論は、目的論的原理に属する諸事実をいわば、拾い集める働きをするのであって、諸事実の性質からこの目的論的原理を引き出してきたのではない。その点が基本的に諸物の諸性質から引き出されるカテゴリーとは全く異なる。すでに私たちが目的論的原理の必然性に関して述べたことを思い起こしていただきたい。悟性のカテゴリーによる必然性は諸物の性質にかかわる必然性である。それに対して、目的論のこうした関連の必然性は、対象の諸性質にかかわらず、目的論的原理によってすでに与えられたもの、すなわち諸概念の結合にかかわる必然性なのである（<sup>A310</sup><sub>C462</sub>）。

#### 第四章 結 論

カントの目的論の原理を再びここでまとめて考えてみたい。筆者自身まだ十分に考えつくしていない部分があるが、それはそのままに記して、今後の課題にしておく。

すでに述べたように有機的物体の諸関連の考察から、カントの目的論の原理は導き出された。それは目的と手段との関連でとらえられた原理であった。しかしながらこれは本来のある種の有機的物体のもつ力——自分自身のうちにあの形成する力や自分を繁殖させ、形成させる力——といったものからみると、この原理の条件は弱い条件である。だが弱い条件であるからこそ、他のもの（自然全体、国家組織）への適用が考えられたともいえる。あるいははじめからカントはそのような適用を意図して、この原理を考えたとみるべきかもしれない。

もともとカントには有機的物体に対して、特別の考え方がひそんでいるように思われる。つまり有機的物体の本質にはどうしても踏みこんでいけない不可解さがまわりついていると考える。私たちはそれに生命という語を付すが、もちろんそのことによって生命の実体が明確になったわけで



はない。この有機的物体のもつ、とりわけ生命と呼ぶものに対する不可解さに関して、現代科学は確かに多くの情報を与えてくれている。が基本的にはこの不可解さはなお解消されていないと私には思える。ただはっきりしていることは、次のことである。カントはこの有機的物体の生命というべきものを動かしているものとして、なにか超自然的なもの（たとえば神）を、その有機的物体の外に考えることを避けようとしていることである。なぜなら、それは有機的物体を解明したことにならないからである。同様のことは目的論の原理についてもいえる。目的とは本来人間の意図的行為にみられるように、人為的な概念である。だから目的論の原理はひょっとすると、そのような意味あいでは擬人的に理解されかねない。そこでカントはこの目的と手段との関連を、あくまでその体系内で考えようとする。目的論の原理が相互に目的とも手段ともなりうる、とはまさにそのことの表明なのである。その体系の外になにもものかが、体系そのものの内的関連に決定的な影響を与えるような力を、排除した結果なのである。だから、目的論の原理は、その部分が相互に目的でもあり、手段でもあるようなあの体系が存在する、と理解したほうがよい。目的という語にひかれて、その体系の外に、それを意図した人間やその他のものを想定する必要はない。

もっとも重要なことは次の問題である。この目的論の原理の正当性はどこにあるのか、明らかに目的論の原理はカテゴリーのような構成的な原理ではない。カテゴリーは基本的に対象そのものの性質に基づいて出てくる原理だからである。それに対して、この目的論の原理を正当づけるものは、カントのいうところの有機的存在者が唯一のよりどころなのである。そこにおいてはじめて、その原理なしには有機的存在者は、有機的存在者として成り立たないといえるからである。はじめカントは種々の合目的性のうちに、その正当性の根拠を求めようとしたように思われる。そのなかでもっとも有望であったのが、算術や幾何学の諸原理間にみられる合目的性であったといえよう。しかしカントの結論はこうである。どんなにこれら諸原理間に合目的性が認められようとも、それだからといって物理学に合目的性を導入する根拠とはならないこと、いいかえれば、それら諸原理間の合目的性から、目的論の原理の正当性を根拠づけることはできない、ということである。

以上のことから目的論の原理に関していえることは何か。この原理はカントもいうように一種の統制的原理である、ということである。しかもこの統制的原理は一方で有機的存在者を有機的存在者たらしめる原理でありながら、他方目的論の原理を他のものに、たとえば自然全体にまで適用しようとする原理でもある。このとき、この目的論の原理は統制的原理のもの一つの性格、発見的原理として機能する。なぜなら、目的論の原理のもとに、新しい諸事実をこの原理との関連でまとめあげ、メカニズムの原理では及ぶことのできない新しい視点をつけ加え、補充しようとするものだからである。

[注]

- (1) 「判断力批判」のページ数の表示は次のとおりである。上段は「カント全集5巻」のアカデミー版のページ数で、数字の前にAをつける。下段は「カント全集5巻」カッシーラー版で数字の前にCをつける。
- (2) 「カント全集7巻」(A190)、「カント全集8巻」(C77)
- (3) 拙論『カントの「美」の分析』鹿児島県立短期大学 人文学論集「人文」(第19号) 1995年8月31日発行

(1996年10月1日受理)